

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	李 瑶
論文題目	中国語複合語における日本語借用語からの語構成上の影響		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位先生論文は、中国語複合語における日本語からの借用語（「日本語借用語」）に着目し、それが中国語複合語の体系に与えた影響について論じたものである。近代における日中間の語彙借用を論じた先行研究は多いが、そのほとんどが語彙の語源及び借用ルートの考証に重きを置いている。それに対して、本論文は、日本語借用語が中国語の造語方法・語構成構造の面に如何なる影響を与えたかということ、そしてその具体的なメカニズムについて体系的に論じたものである。本論文は第I部「本論」（第1章～第6章）と第II部「附録」（「中国語複合語における日本語借用語一覧」および「中国語複合語における西洋宣教師の造語一覧」）から構成される。</p> <p>「本論」第1章では、「日本語借用語」に定義を与えた上で、先行研究を整理し、その不備を指摘して、本論文が中国語複合語における日本語借用語を体系的・包括的に研究すること、とりわけ日本語借用語が中国語語彙に語構成構造の面で与えた影響について検討することを述べている。また、本論文の歴史的な語彙調査のために如何なる資料を用いるべきなのかを論じ、一般的な中国古典以外に重要なものとして、①漢訳洋書、②清末中国人による世界事情・地理に関する文献、③蘭学資料・英学資料といった三種の文献があることを確認した上で、具体的な紹介を行っている。</p> <p>第2章では、中国語複合語と日本語借用語との関係について論じている。中国語史において複合語が急増した中古期（魏晋南北朝）と清末民初のいずれも大規模な外国語翻訳が行われた時期であることを踏まえ、中国語複合語の増加には、外国語の影響が無視できない要因であるとの考えを示した上で、清末民初において中国語複合語が大量に増加した現象には、日本語借用語が重要な役割を果たしていた蓋然性が高いと主張している。</p> <p>さらに本章では、日本語借用語が中国語複合語の体系に受容される際、如何なる現象が生ずるのかについても検討を加えている。一般の中国語複合語は、中国語の史的変遷のなかで句レベルの構造体が固定化されて一語化するのであるが、日本語借用語の場合は、日本語の体系内において漢文訓読や欧米概念の翻訳の際に句レベルの構造体ではなく一語として再認識されるという経過を辿り、その後これが中国語に受容された際も、一語として定着していったのだと指摘する（「一語化の代行」と称する）。</p> <p>第3章では、形態素や文法のレベルにおける日本語借用語の中国語複合語に対する影響を検討している。中国語の語彙体系において日本語借用語が普及・定着するに伴い、それを構成する個々の形態素に関しても、日本語借用語に影響を受けた意味変化や新しい意味の添加が生ずる現象が確認されると指摘している。さらに、「悪性」「大型」などの一部の日本語借用語が中国語に借用された後、専ら「非述形容詞」として用いられるようになる現象に着目し、これは当該の形態素の文法機能において、日本語体系内で最</p>			

も常用されていた用法のみが選択的に中国語に借用された現象であると主張している（「形態素機能の選択的借用」）。

第4章では、本来はその外部に目的語を伴うことができないVO型動詞が、清末民初に外部目的語を伴うことができるようになったメカニズムを論じている。『現代漢語詞典』から、日本語借用語であることが疑われるVO型動詞（Vが2価動詞であるもの）を抽出し、日本語・中国語の双方における意味用法を調査した上で、次のようなモデルを提示している。

第一段階の清代以前では、統語レベルのVO型の構造体であり、外部に目的語を伴うことができなかった。第二段階は、日本語において新たに造語された、或いは受容された段階であり、意味変化が生じ、活用語尾が付加されて他動詞として使用されることにより（主に「ヲ」格で対象をとる）、内部の語構成構造に対する意識が希薄化し、一語と認識されるようになった。第三段階は、中国語に借用または再流入された後の段階であり、中国語複合語として受容された後も、意味のみならず、文法機能面でも日本漢語としての他動詞機能を維持することとなった。

第5章では、中国語の文法体系からすると、動詞性形態素Vが直接修飾語となり名詞性形態素Nを修飾するという「特殊」な修飾構造の名詞（「V>N型名詞」）の生成過程について、日本語借用語の影響の観点から論じている。まず、これら「V>N型名詞」について、歴史層と構造の類型からの分類を行った上で、多くのものが、次のような造語メカニズムにより生成されたと主張する。すなわち、①他動詞性であった動詞Vが日本語に借用された後、②当該のVが非述形容詞性形態素に再分析されるか、名詞Nが接辞的名詞性形態素へと再分析されたというものである。さらに、日本語借用語が中国語語彙に与えた文法的な影響として、複音節助辞の形成、接尾辞の発達などの面も挙げられることを具体的に指摘している。

第6章では、本論文の各章の内容をまとめ、今後の課題について述べている。

第II部の「附録」では、「中国語複合語における日本語借用語一覧（附：借用元の日本語）」と「中国語複合語における西洋宣教師の造語一覧」を収録している。前者は、本論文で認定した日本語借用語1819語について、先行研究および本論文独自の考証を踏まえつつ、①初出時期・借用前の語構成構造、②中国語への借用時期、③借用後の語構成構造・借用前後の意味変化の有無、④借用元の日本語源語としての常用時期、⑤日本語源語と中国語複合語の語構成構造上・意味上の同一性、といった点を一覧表にしたものである。さらに、必要に応じて個別の語彙についての補足的説明を行っている。後者は、中国語複合語における西洋宣教師により造語された語彙の一覧表であり、141語を認定した上で、当該の語の用例がみられる漢訳洋書名を網羅的に記載している。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、中国語の複合語体系内に存在する日本語からの借用語（「日本語借用語」）について、それらが中国語複合語の語構造に影響を与えたメカニズムを解明することを目指したものである。具体的には、「動詞＋目的語」型の複合動詞（「VO型動詞」）が外部に目的語を伴う現象、「動詞性修飾成分＋名詞」型の複合名詞（「V>N型名詞」）が生成される現象といった、中国語の文法体系からすると「特殊」な現象に着目しつつ、その特殊性が日本語借用語によってもたらされたものであることを論証した上で、その要因とプロセスとを検討している。

本論文は広義の「近代日中語彙交流研究」に属するものと言えるが、当該の分野の先行研究では、個々の語彙の生成地域、意味変化、伝播ルートなどの考証に重きが置かれることが多かった。しかし、近代において日本語借用語が中国語に大量に流入したのであれば、文法レベルにおいても中国語に影響を与えた蓋然性が大きい。先行研究においても中国語複合語における接辞的形態素については、日本語借用語からの影響をみとめる説が提出されているが、本論文のように、特定の語構造をもつ中国語複合語すべてを対象として、体系的・包括的な研究を行ったものは皆無に近かった。このような体系的・包括的な研究が困難であったのは、中国語の特定の語構造を有する複合語すべてについて、その意味・語形成の史的変遷を千年単位で調査する必要があり、その作業には膨大な労力と古代中国語についての高い読解能力、そして各時代の中国語の特徴的な文法現象に関する深い知識が必要とされるからである。

本論文の主な成果は以下の四点に整理できる。

第一点は、「VO型動詞」（Vが2価動詞のもの）がその外部に目的語を伴う現象、ならびに「V>N型名詞」（Vが他動詞性のもの）が生成された現象について、それらが日本語借用語を媒介にして中国語に持ち込まれたものであり、日本語借用語が中国語複合語に語構成レベルでの影響を与えていたことを論証したことである。この論証は、「VO型動詞」ならびに「V>N型名詞」について、中国語史における意味・語形成の推移の記述研究を行った上で、両現象が清末民初に急増することなどを根拠になされており、強い説得力を持つものである。

第二点は、日本語借用語の概念規定と認定に対して、中国語史との関わりを論ずる際に有効な方法を提示したことである。日本語借用語を、日本語体系内に少なくとも一度は取り込まれ日本語を経由して中国語複合語として借用された語彙と考えることにより、語源の問題とは切り離れた議論を可能にしている。さらに個々の語彙の認定については、当該の複合語を中国語史（文法史・語彙史）の中に位置づけ、機能的・意味的な突発的変化が見られるか否かを重視するという、いわばマクロ的観点による認定方法を合わせて提示している。この方法の創出は次の第三点の大きな成果に結びつくものである。

第三点は、漢字を媒介とした言語接触における語形成レベルでの相互影響のメカニズムについて、新たなモデルを提出していることである。本論文が提示するモデルには、①一度日本語を経由することにより、語構造に対する意識が希薄になり、中国語の体系からすると「特殊」な語構造が生じ得る、②膠着語たる日本語では日本語借用語の源語を語幹として受容し、動詞であればそれに語尾「スル」を付加して使用するが、それらが中国語に借用された際には、その語尾の機能のみが借用される（ゼロ形式の語尾として借用される）、③日本語借用語が日本語体系内において備えていたすべての機能が中国語に借用されたのではなく、常用された機能のみが借用される場合がある（「形態素機能の選択的借用」）、といった従来の研究では指摘をみなかった

主張が内包されており、高く評価できる。

第四点は、「附録」の「中国語複合語における日本語借用語一覧（附：借用元の日本語）」において、日本語借用語として1819語を認定し、それらの近代前後における意味・語構成の変化（あるいは不変化）を一覧表として提出していることである。この一覧表は、今後の日本語借用語研究の分野において、重要な基礎資料となり得るものである。

確かに、本論文にも不足な点がないわけではない。日中間の語彙借用の伝播が具体的に如何なる「場」においてなされていたのかの検討が十分ではない点、さらに近代以前の日本における漢字語の変遷に関する調査がなお不十分な点などである。今後、申請者が研究を深化させていくなかで、取り組んでいくべき課題であろう。

本論文は、とりわけ日中間の書面語レベルの言語接触の問題のみならず、ひろく漢字文化圏における漢字を媒介とした言語接触の問題に関して、議論の基盤を提供するものであり、すぐれた研究であると評価できる。

以上から、本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、令和4年3月23日までの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降